



まもなく冬休みがやってきます。みなさんは4月から本を何冊読みましたか。今年の冬休みは18日間と少し長め。文庫本の1冊位読むには十分な時間。こたつで蜜柑でも頬張りながら読書に勤しんでみるのもたまにはいいものです。まだ1冊も読んでいない方は、取手二高の図書館で本を借りて読んでみましょう。

《あなたの心にこの1冊！～今月のお薦め～》

『コンビニ人間』 村田沙耶香(著) 文春文庫

言わずと知れた芥川賞受賞作。「普通」とは何か?自分らしさに悩む全ての人に。予想外の展開と結末には、読後自分はこのままでもいいんだと勇気づけられる1冊。きっとモヤモヤが晴れてスカッとする事請け合い。



『女の子が生きていくときに、覚えていてほしいこと』 西原理恵子(著) 角川書店

取手二高女子にぜひ読んでほしい1冊。『毎日かあさん』等で知られる人気漫画家が女の子に送る自らの人生経験に基づいた「王子様を待たないで」等の独特の応援メッセージは、温かくもリアルで説得力大。先生のお説教聞くより100倍役に立つと思うなあ。(笑)読むとこれからの人生が変わるかも…。



『蜜蜂と遠雷』 恩田陸(著) 幻冬舎 図書館にあります。

史上初の直木賞と芥川賞のダブル受賞をし、今年10月には人気若手俳優主演による映画も公開された話題作。クラシック音楽好きの人もそうでない人も、読み始めるときっと作中に登場する音楽を聴きたくなるかも。そんな時には同タイトルのCDも販売されているので、音楽を聴きながら読むのもお薦め。♪



冬休み中図書館は休館です

図書館整備のため、冬休み中は図書の貸し出しをお休みします。



2回の予定で始めたこのエッセイも、4回になってしまいました。今回は最終回となります。

高校生の頃に詩にひかれるようになり、次第にのめり込んでいったということをこれまでに書いてきました。もともと本を読むことは好きで、自分でもあれこれ書いたりしていましたが、詩を読み、自分でも見よう見まねで、詩を書き出しました。ですから、大学に進む時には、文学部しか考えていませんでした。

文学部は、最近人気がなくなり、私も進路指導をしていた頃、よく生徒たちに、「文学部に行くと、何になれるんですか」と尋ねられたものです。そう聞かれて、私はびっくりしました。文学部というところは、何かになるために行くところじゃない。いや、大学というものがそもそも「何かの職業に役立つ」ために行くところではないと思うのです。「何かに職業に役立つ」のは、むしろ専門学校であって、専門学校は職業に直結しています。

学問というものは、そもそもそういうものではない。最近は、「実学」と「虚学」という言い方もあって、役立つ学問を「実学」、すぐには役立つ学問を「虚学」というのです。「虚学」なんて、いやな言い方ですね。実学はともかく、虚学なんてものはないと思います。学問に無駄なものなどない。これは私たちの人生に無駄な人生なんてないのと同じです。生きていく限り私たちはいろいろなことに悩み、考え、行動します。そのひとつひとつに無駄なものなど一切ないように、学問に無駄なものなどないのです。

だから、わたしは何かになろうとして文学部に進んだわけではありません。わたしは、文学が好きだったから文学部に行ったのです。もっと深く勉強したいと思って。これ以上の回答があるでしょうか。だって、よく「自分の好きなものを見つけなさい、そうすれば自分の道も見えてくるから」と言うじゃないですか。

自分の祖父が教師だったことも影響したのか、わたしは教員の資格を取り、教員になりました。大学で学んできたことが必ず役に立つと思って。

詩はずっと読み続け、ずっと書き続けてきました。これまでに4冊の詩集を出し、たぶん来年には5冊目の詩集を出すことになるでしょう。

わたしがあある学校からあある学校に異動する時に、その離任式で、30代の頃に書いた詩を生徒たちの前に読みました。長い間詩を書いています、若い人たちへのメッセージとなるような詩はあまりなくて、この詩なら高校生に贈るのに向いているかなと思って読んだのです。最後に、その詩を引用してこのエッセイを終わりたいと思います。

一条のひかり

ときおり君は

あの時あしていれば と呟くことがある

だが 本当にその時そうしていたら

いまの君はきっと

いまの君とは違ったものに

なっていた

かも知れないじゃあないか

だとすると

ああしていればといまここで呟いている君も

ここにはいないわけで

ぱちぱちと火花をあげる線香花火

火花はいくつものに枝分かれして輝く

枝分かれしたいいくつかの可能性のひかり

それらは一瞬だけ輝いては消えていき

決して遠くまで届くことはない

だけどぼくたちの時間は

届いたところからしか始まらない

違うか？

君が何かを取るとき

君はそれ以外の無数の何かを取らない

取られなかった無数の何か

君の周りを占めている

それがつまり

君の空だ

ぼくにしても 君にしても

そんな空を

一条のひかりとなって飛んでいる

のでは

ないだろうか